

# マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する研究

—自己概念の変化と横断比較による評価—

井澤 悠樹・松永 敬子\*

## **Study about program evaluation of marine & recreation program: evaluation by change of the self-concept and crossing comparison**

Yuki Izawa, Keiko Matsunaga\*

### 抄 録

本研究の目的は、学生の自己概念の変化、及び過去3年間のデータとの横断比較によってマリン&レクリエーション実習のプログラム評価を行い、今後のマリン&レクリエーション実習の為に基礎資料を得ることである。

データは、マリン&レクリエーション実習に参加した学生34名から収集した。事前調査・事後調査の2回の質問紙調査を行い、事前調査・事後調査共に32部(94.1%)の有効回答を得た。また、実習の振り返りを自由記述で求めた。

主な結果として、実習を経験することで学生の自己概念は有意な向上を示した。その理由として、1) 実習日が1日延長されたことに伴う自己と向き合う時間の確保、2) 新規プログラムの導入の影響が示唆された。

**キーワード：**プログラム評価、自己概念、横断比較

(2012年10月1日受理)

### **Abstract**

The purpose of this study were to evaluate the Marine & Recreation program by examining both the change of the students' self-concept and the crossing comparison with data of past three years, and to obtain fundamental data applicable for the future Marine & Recreation program.

The questionnaire was given twice, pre-test and post-test, to 34 students who had participated in the Marine & Recreation program. Both tests provide 94.1% of usable data. In addition, post-test requested students to reflect on the Marine & Recreation program through free writing.

---

\*龍谷大学

As a result, significant increase in the students' self-concept was verified. As reasons for this, 1) students gained more time to face oneself from additional stay, 2) the effect of introducing new program were suggested.

**Key words:** program evaluation, self-concept, crossing comparison

(Received October 1, 2012)

## 1. 諸言

高等教育機関で開講されている野外活動に関連した実習は、野外活動、スポーツ・レクリエーション活動に関連した指導者資格取得の一環として展開されている場合が多い。しかしながら本学で展開されているマリン&レクリエーション実習（以下、マリン）は、指導者資格を取得する為の実習ではなく、1) 自身への気づき、2) 他者との相互理解、3) 自然への理解の3点を目的として設定しており、あくまでも学生自身の人間的成長を目的として開講している。

これまでも筆者らは、実習担当者としてマリンのプログラム評価について報告を行ってきた（井澤・松永，2009；2010；2011）。その中で、学生がマリンを経験することで、少なからず心理的な変化が示されている。これらは、野外教育によってもたらされる、1) 自然への理解を深めること、2) 感性や知的好奇心の育成、3) 創造性や向上心の育成、4) 親和・協調性の育成、5) 自律・自発性の育成、6) 自己拡大、7) 自己客観視など（日本野外教育研究会，2001）を含めた気づきであり、定量的・定性的分析によってその気づきが生み出されている。しかしながら、これまで客観的指標による変化、つまり定量的分析において統計的に有意な変化が認められた訳ではない。その理由として、実習期間やプログラム内容が考えられる。

例年の結果では、気づきを得ていることが示唆されているものの、その変化が定量的分析によって統計的に有意な変化を示している訳ではない。これは、影山ら（1988）や橘ら（2003）が指摘しているように、変容に影響を与える要因の1つとしてプログラム期間の差異があることや、キャンプ期間やプログラム内容の差異が対象者に与える効果に影響を及ぼすということが考えられる。本学のマリンは、例年2泊3日で実習を行っているが、初日の午後に実習地入りし、最終日も正午には帰路に着くことを考えれば、実質的な活動は2日目のみであり、多様な経験や時間をかけて自己と向き合う時間を取ることができていない。これに対して、自己概念の変容に注目している先行研究（影山ら，1988；関根ら，1996；橘ら，2003；近藤，2004；渡邊ら，2005）が対象としている野外活動は、3泊4日以上プログラムが多く、長いものでは1～2週間のプログラム内容で展開されている。そこで、2012年度の本学におけるカリキュラム改定に伴い、マリンの日程を2泊3日から3泊4日とした。これにより、例年に比べて実質的な活動時間の確保・時間的余裕の確保が可能となり、更には、新規プログラムの導入も可能となった。例年行われていたマリ

ンをベースとして、他者との関わり・課題解決に焦点を当てた新たなプログラムを導入し、2012年度のマリンを展開するに至った。

そこで本研究では、例年において統計的に有意な変化が認められなかった気づきが、プログラム期間とプログラム内容の変化によって明確に表れるのかを明らかにしていく。特に、学生の気づきの部分を自己概念の変化として捉え、マリンの事前・事後での比較を行うと共に、過去3年間のデータとの横断比較によってプログラム評価を行う。

## 2. 目的

本研究の目的は、マリンを経験することによる学生の自己概念の変化、及び過去3年間のデータとの横断比較によってマリンのプログラム評価を行い、今後のマリンをより良いプログラムとする為の基礎資料を得ることである。

## 3. 研究の視座

本研究は、自己概念の変化に焦点を当ててマリンのプログラム評価を行う。

プログラム評価は大きく分けて、プログラムの「プロセス」と「アウトカム」の2つが対象となる(安田ら, 2008)。「プロセス」はプログラムの施行・運営方法・参加率などのプログラムの働きと機能に焦点を当て、「アウトカム」では、参加者が得た利益(心理的变化)などのプログラムの結果や効果の測定が対象となる。つまり、本研究で述べるプログラム評価とは、学生の人間の成長を求めて実施されるプログラムの査定であることから、「アウトカム」に焦点を当てたものとなる。

Patton (1997) は、プログラム評価を「プログラムの活動、性質、アウトカムの情報を体系的に収集し、当該プログラムについて何らかの判断を下し、プログラム介入による効果の改善を行い、将来のプログラムについての決定を行うこと」と定義しており、Weiss (1998) はアウトカムを「プログラムが対象者に対してもたらす結末」と述べている。つまりアウトカムに焦点を当てたプログラム評価とは、「ある目的に沿って行われたプログラムが対象者にもたらす総体的な結果についての考察であり、将来に寄与する情報収集活動」と理解できる。これをマリンに置き換えた場合、自己や他者に対する気づきを得ることを目的として展開されているプログラムであることから、対象者にもたらす総体的な結果は「気づきを得ているか否か」である。その為本研究では、対象者にもたらす効果として自己概念の変化に注目した。

自己概念とは、「自分について持っている知識やイメージの総称(上瀬, 2000)」であり、自分自身を主観的に捉えた「自分から見つめた自分(影山ら, 2001)」である。つまり、マリンの目的の1つである「自身への気づきが得られているのか否か」を評価する一指標となり得るであろう。

## 4. 研究方法

### 4.1 マリン&レクリエーション実習の概要

マリンの概要は表1の通りである。また、2012年度より1日延泊となり例年とは異なる新たなプログラム（キャンプファイアー（ボンファイアー）、カヌートリップ、野外料理、ネイチャーゲーム）も実施した。

表1 マリン&レクリエーション実習の概要

実習地	神戸YMCA余島野外活動センター(香川県)
実習期間	2012年8月31日(金)～9月3日(月) 3泊4日
対象者	身体活動Ⅱ(マリン&レクリエーション実習)を履修登録した学生34名
主なプログラム	<p>1日目</p> <p>【コミュニケーションゲーム】 初日のプログラムで行われるアイスブレイク。最終的にはプログラムを共に行うグループの作成を目的としているが、普段学内で関わりの無い学生同士のコミュニケーションを図ることに焦点を当てて行う。</p> <p>【マリンプログラム】 初日は、マリンプログラムの中でも着衣泳のみを現地スタッフの指導の下、実施した。</p> <p>【キャンプファイアー】※ 今年度より新たに行ったプログラム。初日の夜にボンファイアーを実施。コミュニケーションゲームと同様、学生間のアイスブレイクを目的に行った。また、ファイアーの最後には心を落ち着かせ、各自で本実習での目標を誓う時間を設けた。</p>
	<p>2日目</p> <p>【マリンプログラム】 カヤック、カヌー(3人乗り)、ヨット、ウィンドサーフィンを実施。各種、現地スタッフの指導の下、実施した。</p> <p>【バーベキュー】 学生間の親睦を目的として実施。現地スタッフの説明後、火起こし等の準備からすべて学生が行う。</p>
	<p>3日目</p> <p>【マリンプログラム】※ カヤック、カヌー(3人乗り)、ヨット、ウィンドサーフィンに加えて、カヌー・トリップを実施。各種、2日目と同様に、現地スタッフの指導の下、実施した。また、カヌー・トリップは今年度より新たに行ったプログラムである。余島を出発し、対面する小豆島までカヌー(3人乗り)でトリップを行う。</p> <p>【野外料理】※ 今年度より新たに行ったプログラム。カヌー・トリップの際の昼食として、カートドックを行った。準備・火起こし等、すべて学生が行う。</p> <p>【火を囲んで】 3日目の夜に行う静かなファイアー。初日のボンファイアーとは異なり、落ち着いた雰囲気の中で自然と向き合い、心静かに自己と向き合い語り合う場として行う。</p>
	<p>4日目</p> <p>【ネイチャーゲーム】※ 今年度より新たに行ったプログラム。最終日の朝に、余島を散策し自然の成り立ちや余島について学ぶ。</p> <p>【振り返り】 最終日の最後のプログラムとして実施。実習を振り返り、実習前の自分と実習後の自分の変化を見つめ、余島での時間がどのような意味があったのか、また今後の自分にどのように活かされていくのかを振り返る。</p>
	<p>2日目から4日目 共通</p> <p>【朝の集い：講師講話】 毎朝、朝の集いにおいて、講師の経験や人生における出会い等についての話を聞き、今後の進路やキャンパスライフについて考えることを目的に行われる。</p>

※ 今年度より新規導入したプログラムを示す。

### 4.2 データ収集

マリン参加による学生の変化を検証する為、質問紙を用いてマリン参加前の事前調査(以下、pre)、及び参加後の事後調査(以下、post)の2回の調査を参加した学生全員に実施した。また、postの際に振り返りとしてマリン参加による自己の変化等に関する自由記述データも収集した。

データ収集に関する詳細は、下記の通りである。

- ・ pre : 2012年8月31日(金)、学生34名に対して、実習地に向かう車中にて質問紙を配布。回答後、その場で回収を行った。回収数(率)は34部(100.0%)であった。
- ・ post : 2012年9月3日(月)、学生34名に対して振り返りの最後にpre時と同様の

質問紙を配布。回答後、その場で回収を行った。また、振り返りの際に、マリンを経験することで感じた自己の変化等に関する自由記述データの収集も同時に行った。回収数（率）は34部（100.0%）であった。

pre・post共に、質問紙の回答には他者の意見への同調や、過去の回答を想起することなく、回答時の自身の率直な意見を反映するように促した。有効標本については、自己概念の測定に用いた自己成長性検査31項目（公益社団法人日本キャンプ協会、2006）を、pre・post共に全て回答している32名（94.1%）のデータを採用することとした。

### 4.3 調査内容

表2は、本研究で用いた調査項目である。個人特性として、学内での所属、現在の運動・スポーツ習慣、過去の運動・スポーツ活動経験、過去の野外活動経験、運動・スポーツ活動に対する嗜好、野外活動に対する嗜好、プログラム期待度・満足度を設定した。プ

表2 調査項目

【個人特性項目】	【自己成長性検査31項目（公益社団法人日本キャンプ協会、2006）】
①学内での所属（短期大学／4年制大学）	<b>達成動機（8項目）</b>
②現在の運動・スポーツ習慣	・私は自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい
③過去の運動・スポーツ活動経験	・私は他の人にはやれないようなことをやり遂げたい
④過去の野外活動経験	・私は将来、立派な仕事をしたい
⑤運動・スポーツ活動に対する嗜好	・私は将来、他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う
⑥野外活動に対する嗜好	・私は自分の理想に向かってたえず向上していきたい
	・私は新しいことや違うことをいろいろしてみたい
	・私は自分の主張を通す方である
	・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う*1
<b>【プログラム期待度／満足度】</b>	<b>努力主義（9項目）</b>
①カヤック	・私は一度自分で決めたことは途中で嫌になってもやり通すよう努力する
②カヌー（3人乗り）	・私は他の人に認められなくても、自分の目標にむかって努力したい
③ヨット	・私はなんでも手がけたことには最善を尽くしたい
④ウインドサーフィン	・私は現在の自分が幸福だと思う
⑤カヌー・トリップ	・私は努力さえすれば成績は良くなると思う
⑥着衣泳	・私はチャンスを逃さなければ、能力のある人は偉くなれると思う*2
⑦キャンプファイアー（ボンファイアー）	・私は人の一生は案外偶然的な出来事で決まるものだと思う*2
⑧火を囲んで	・私は人どうまくつき合っていける方である
⑨バーベキュー	・私はどんな不幸に出合ってもくじけないだろうと思う
⑩野外料理（カートドック）	<b>自信と自己受容（8項目）</b>
⑪コミュニケーションゲーム	・私は勉強や運動について自信を持っている方である
⑫ネイチャーゲーム	・私は自分を頼りないと思うことがよくある*2
⑬朝の集い（講師講話）	・私は今のままの自分ではいけないと思うことがよくある*2
⑭振り返り	・私は現在の自分に満足している
	・私はときどき自分自身が嫌になる時がある*2
	・私は人より劣っているのではないかとと思うことがよくある*2
	・私は他の人をとでもうらやましく思うことがよくある*1*2
	・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う*1
	<b>他者のまなざしの意識（8項目）</b>
	・私は他の人からどんな噂をされているのか気になる方である
	・私は自分が少しでも人から良く見られたいと思うことが多い
	・私は小さいことをよくよと考えることが多い
	・私は何かをしようとする時、他の人が反対するのではないかと心配になる
	・私は自分の心が傷つくようなことを恐れている
	・私は「あんなことをしなければよかった」と悔やむことが多い
	・私は他の人をとでもうらやましく思うことがよくある*1
	・私は人からばかにされたりすることに我慢できない
以上14項目について、期待度では「1. 全く期待していない」から「5. 非常に期待している」、満足度では、「1. 全く満足していない」から「5. 非常に満足している」の各5段階評定尺度でそれぞれ回答を求めた。	
自己成長性検査31項目については、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」の5段階評定尺度で回答を求めた。	

\*1は、他の下位尺度と重複している項目を示す。 \*2は、逆転項目を示す。

プログラム期待度・満足度の測定には、マリンの主となる 14 プログラムに対する期待度を pre 時に、満足度は post 時に回答を求めた。14 プログラムについて、期待度では「1. 全く期待していない」から「5. 非常に期待している」、満足度では「1. 全く満足していない」から「5. 非常に満足している」の各 5 段階評定尺度で回答を求めた。学生の自己概念の変化の測定には、自己成長性検査 31 項目（公益社団法人日本キャンプ協会，2006）を設定した。この自己成長性検査 31 項目は、達成動機（8 項目）、努力主義（9 項目）、自信と自己受容（8 項目）、他者のまなごしの意識（8 項目）で構成されている。pre・post 共に、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの 5 段階評定尺度で回答を求めた。

なお、本調査は無記名での回答であり、得られた回答は全て統合されて統計処理にかけられる為、特定の個人を抽出して公開されることは無いとの記載を質問紙の冒頭に加えた。

#### 4. 4 分析方法

分析は、以下の手順で行った。初めに、個人的特性について分析を行った。学内での所属、現在の運動・スポーツ習慣、過去の運動・スポーツ活動経験、過去の野外活動経験、運動・スポーツ活動に対する嗜好、野外活動に対する嗜好について単純集計を行った。続いて、14 プログラムの期待度・満足度の差異の分析を行った。期待度では「1. 全く期待していない」から「5. 非常に期待している」、満足度では「1. 全く満足していない」から「5. 非常に満足している」の各 5 段階評定尺度で回答を求めて数値化し、それぞれの平均値を算出した後に、対応のある t 検定を行った。

次に、学生の自己概念の変化について分析を行った。自己成長性検査 31 項目（公益社団法人日本キャンプ協会，2006）全てで自己概念の構成を仮定していることから、pre・post それぞれで 31 項目の合成変数を算出し、その平均値の差の検定について、対応のある t 検定を行った。また、自己概念を構成する下位概念毎の変化を明らかにする為に、達成動機 8 項目、努力主義 9 項目、自信と自己受容 8 項目、他者のまなごしの意識 8 項目に分類し、各因子において合成変数を算出し、その平均値の差の検定について、対応のある t 検定を行った。

これら定量的分析で得られた結果と併せて、振り返りで得た自由記述による定性的データを用いて考察を行なった。また、過去 3 年間のデータを比較対象として用いた。

なお、本研究で行う検定は有意確率を 5% に設定し、分析を行った。

### 5. 結果および考察

#### 5. 1 対象者の属性

##### 5. 1. 1 対象者の特性

表 3 は対象者の特性を示したものである。マリンを履修した学生の所属割合は、短期大学所属・4 年制大学所属が各 50.0% であった。現在の運動習慣では、「全くやらない」が最も多く 37.9%、反対に、現在定期的に運動・スポーツを実施している者（週 1 日以上）

者)は17.2%であり、比較的、低い値を示した(2009年:22.8%、2010年:33.3%、2011年:16.7%)。過去の運動経験については90.6%、過去の野外活動経験では54.8%の者が「ある」と回答した。運動・スポーツに対する嗜好・野外活動に対する嗜好共に80.0%以上の者が「好き」「どちらかといえば好き」のいずれかを回答しており、アクティビティに対して非常に肯定的であることが伺えた。

表3 対象者の特性

<b>【所属】</b>	(n)	(%)	<b>【運動・スポーツ活動に対する嗜好】</b>	(n)	(%)
短期大学	16	50.0	好き	19	59.4
4年制大学	16	50.0	どちらかといえば好き	8	25.0
合計	32	100.0	どちらかといえば嫌い	3	9.4
<b>【運動・スポーツ実施習慣】</b>	(n)	(%)	嫌い	2	6.3
週3日以上	1	3.4	合計	32	100.0
週1日～2日程度	4	13.8	<b>【野外活動に対する嗜好】</b>	(n)	(%)
月に1日～2日程度	7	24.1	好き	11	34.4
年に数回程度	6	20.7	どちらかといえば好き	17	53.1
全くやらない	11	37.9	どちらかといえば嫌い	4	12.5
合計	29	100.0	嫌い	0	0.0
<b>【過去の運動・スポーツ実施経験】</b>	(n)	(%)	合計	32	100.0
ある	29	90.6	mean (年)	6.73	
ない	3	9.4	S.D.	3.95	
合計	32	100.0			
<b>【過去の野外活動経験】</b>	(n)	(%)			
ある	17	54.8	mean (回)	3.38	
ない	14	45.2	S.D.	2.72	
合計	31	100.0			

### 5. 1. 2 プログラム期待度と満足度の比較

図1は、マリンの主となる14プログラムの期待度と満足度の比較を行ったものである。結果、ウィンドサーフィン以外で満足度が期待度を上回り、10プログラムで統計的に有意な差が認められた。しかし、マリンのメインプログラムとも言えるマリンスポーツ(カヌー・ヨット・ウィンドサーフィン・カヌートリップ)においては、期待度と満足度の間に統計的に有意な差が認められなかった。その理由として、マリンスポーツへの期待度が非常に高かったこと(期待度平均得点が1位から4位)、また、予想以上にマリンスポーツ各種目の操作や技術習得が難しかったことが考えられる。但し、満足度が期待度を下回らなかったことを考えると、期待通りの満足度を得ることができていると考えられるのではないだろうか。

また、満足度が期待度を有意に上回ったプログラムの中でも、特に顕著である朝の集い(期待度14位→満足度3位)・火を囲んで(期待度8位→満足度4位)は、事前ガイダンスで内容を説明しているものの、マリンスポーツ等に比べるとイメージし辛いプログラムである。しかし、振り返りの自由記述でも多く見られたように、「講師やスタッフの話の中に、現在の自身の生活や今後について多く得るものがあった」ことが、満足度の有意な向上を促したと考えられる。

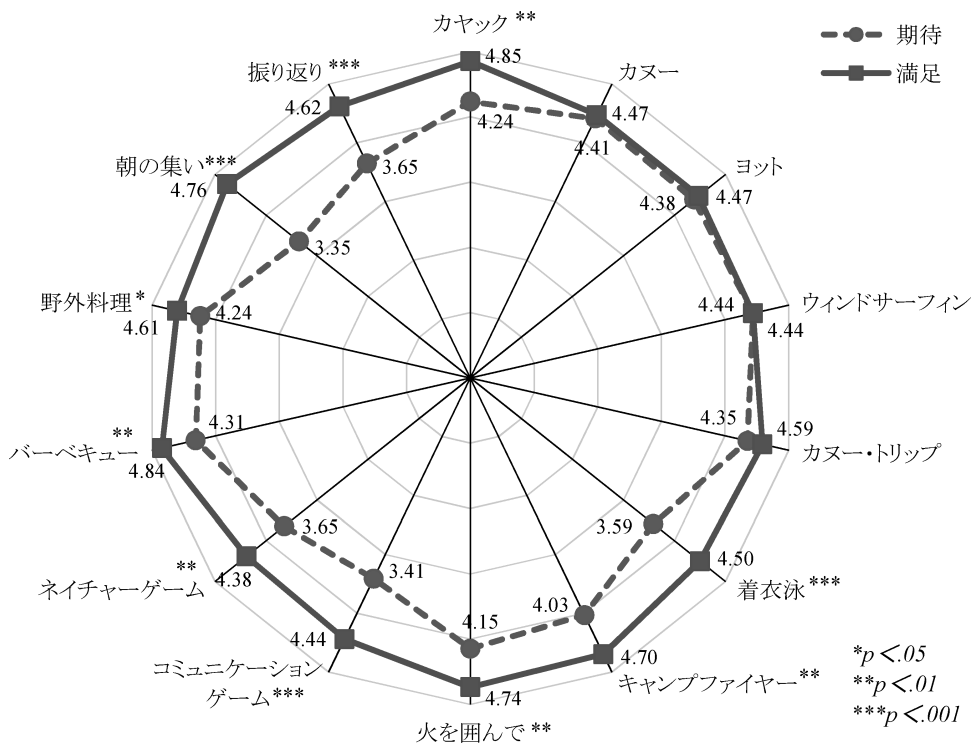


図1 主となる14プログラムの期待度・満足度比較

## 5.2 自己概念の pre・post 比較

図2は、自己概念の pre・post 比較を示したものである。先行研究(公益社団法人日本キャンプ協会, 2006; 井澤・松永, 2010; 2011)にならい、pre・post それぞれにおいて31項目の合成変数を算出し、その平均値の差の検定について対応のある t 検定を行った。自己概念31項目の得点幅は37点から161点である。

結果として、マリンを経験することで学生の自己概念は統計的に有意な向上を示した ( $t(31)=-2.15, p<.05$ )。過去3年間では、数値上の向上は見られたが統計的に有意な向上は認められなかった。この理由として以下の2つが考えられる。

まず1つめとして、プログラム要因が考えられる。つまり、プログラム期間の変更(1日の延泊)と新規プログラムの導入である。影山ら(1988)が、自己概念の変容に影響を与える要因の1つとしてプログラム期間を挙げていることや、橘ら(2003)がキャンプ期間やプログラム内容の差異が対象者に与える効果に影響を及ぼすと報告していることから、プログラム期間の変更と新規プログラムの導入が2012年度の自己概念の有意な向上に影響していることが考えられる。

また2つめに、上記で述べたようにプログラム期間が変更したことで、個々で自分自身と向き合う時間を持てたことが考えられる。振り返りにおける自由記述の例年の傾向は主に、1) マリンプログラムにおける成功体験の有無(マリンスポーツ各種目について、上



手く操作できるようになった等)、2) 課題達成に向けた他者との協力関係の有無(プログラム中でのグループメンバーとの協力関係の有無)、3) 講師講話の刺激(朝の集い等での講師・スタッフの話)であった。しかしながら、今年度の自由記述では上記3点に加えて、同年代の現地ボランティアとの関わりで得た刺激や学生間の関わりの中で得た刺激に関する「他者との関わり」に関する記述、また講師講話や他者との関わりを経験した上で「自己と向き合う機会となった」「自分を見つめなおすきっかけになった」「(マリンの期間中)

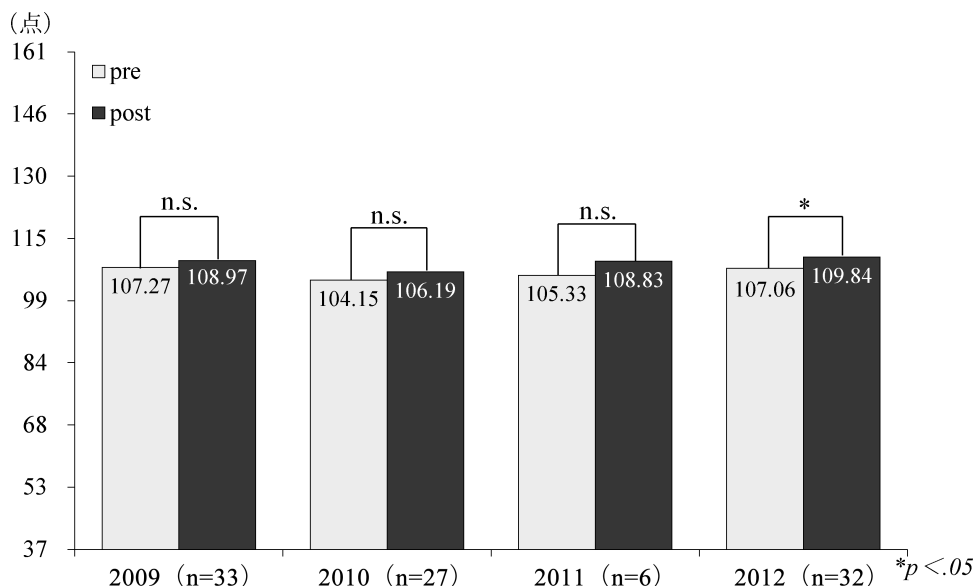
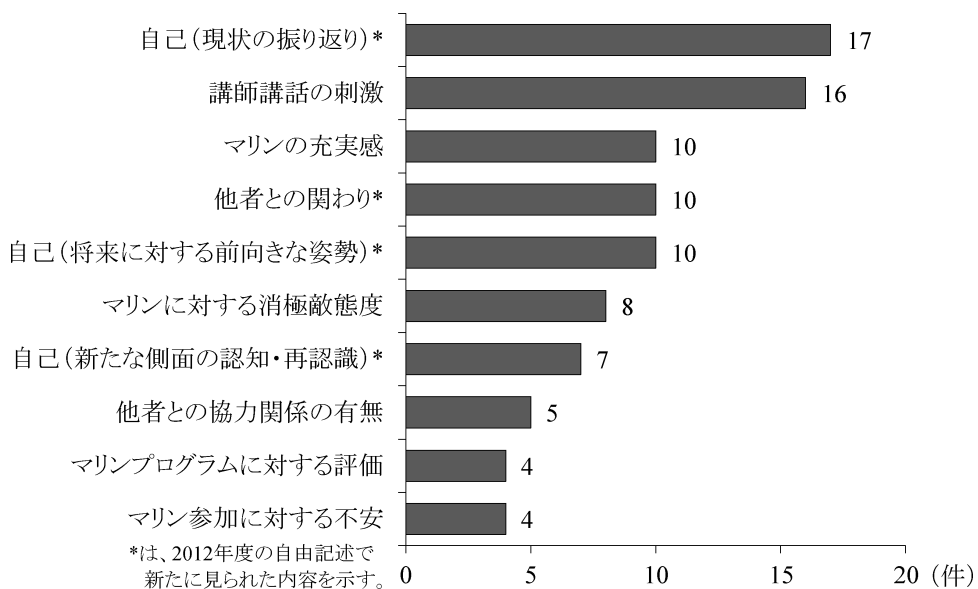


図2 自己概念の pre・post 比較



\*は、2012年度の自由記述で新たに見られた内容を示す。

図3 自由記述の内容

自分の将来について、一番考えさせられた」などの「自己」に関する記述が多く見られた(図3)。つまり、例年のように「他者との協力関係の有無」や「マリンプログラムでの成功体験の有無」での経験に加えて、講師講話や他者との関わりによって得た刺激を各々が咀嚼し、今の自分と向き合い「自己」について考える作業にまで至っていたことが考えられる。自己概念とは、自分自身を主観的に捉えた評価であり、「自分から見つめた自分(影山ら, 2001)」と説明されていることから、自己と向き合う経験を持てたことが自己概念の有意な向上に影響を与えていると考えられる。

### 5. 3 自己概念下位尺度の pre・post 比較

次に、自己概念を構成する4つの下位尺度毎における検討も重要であるとの指摘があることから(梶田, 1988)、下位尺度毎での pre・post 比較を行い、検討を重ねる。

#### 5. 3. 1 達成動機得点の pre・post 比較

図4は、達成動機得点の pre・post 比較を示したものである。達成動機とは、目的を達成する上でのモチベーションの役割を担う。達成動機の得点幅は、8点から40点である。

結果、pre・post 間で1.22ポイントの有意な向上が認められた( $t(31)=-2.41, p<.05$ )。自由記述では、マリン参加前の心境として「面倒くさく感じていた」「行くかどうしようか迷った」などのマリンに対する消極的態度は、例年と変わらず見受けられた。しかし反対に、「マリンへの参加を楽しみにしていた」などのマリンに対する積極的態度に関する記述も散見された。また、「短大(または四大)の子と関わりたいと思っていたので良い機会だと思っていた」などの記述があったことから、何らかの目的を持ってマリンへ参

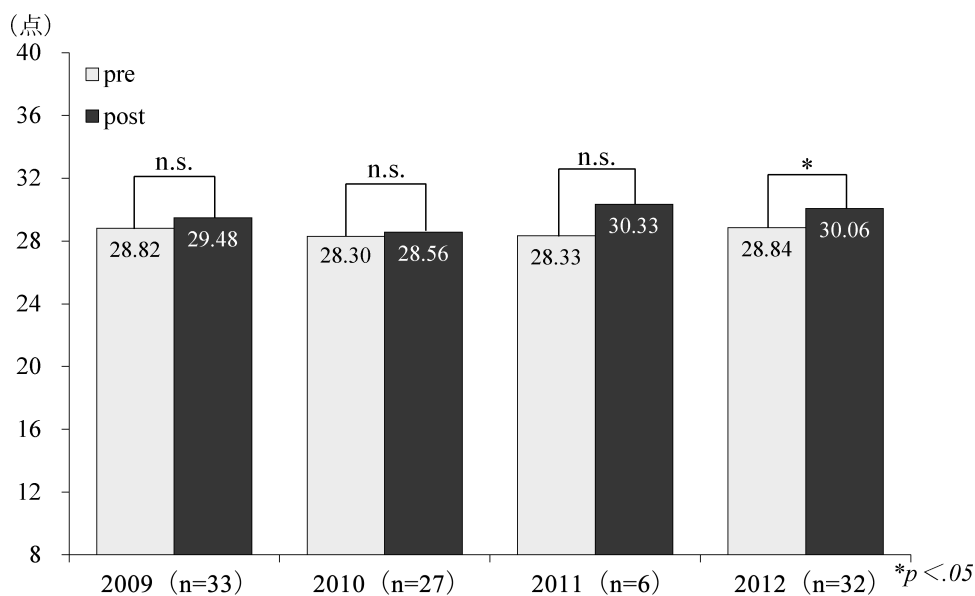


図4 達成動機得点の pre・post 比較

加していたことが伺える。またそこに、初日のキャンプファイアー（ボンファイアー）の際にマリンでの個人目標を掲げさせたことも影響があろう。

先述したとおり、達成動機は目的を達成する上でのモチベーションの役割を担う。もちろん、マリンは授業の一環として行っているので実習目的が掲げられている。しかし、実習目的とは別に個々で明確な目標を掲げさせたことで、それぞれが活動を行う上での1つの動機となっていたことが考えられる。

### 5. 3. 2 努力主義得点の pre・post 比較

図5は努力主義得点の pre・post 比較を示したものである。この因子は、達成動機を基盤とした行動の基本的規範、自己統制の態度を示す概念である。つまり、目標達成に向けた姿勢や意志に関する項目で構成されている。この努力主義の得点幅は、9点から45点である。

結果、1.57ポイントの統計的に有意な向上を示した ( $t(31)=-3.27, p<.001$ )。これは過去3年間と比較しても高い伸び率である (2009年:0.85ポイント、2010年:1.48ポイント、2011年:0.67ポイント)。この理由として、マリン全体を振り返った際に「(難しいプログラムに対して)挑戦しようとしている自分がいた」、「『せっかく来たからには楽しもう!』と声を掛け合った」などの記述が見られたことから、マリン自体を肯定的に捉えて4日間を過ごしていたことが要因の1つとして考えられる。

また、初日に掲げた個々の目標に対しても、「『何事も楽しむ』という目標は達成できたと思う」、「新しいことをするのはとても新鮮で、何かを達成する度に気分が良かった」などの達成感や、「『すぐに諦めない』という個人目標に対して) しんどいことが多かったが、

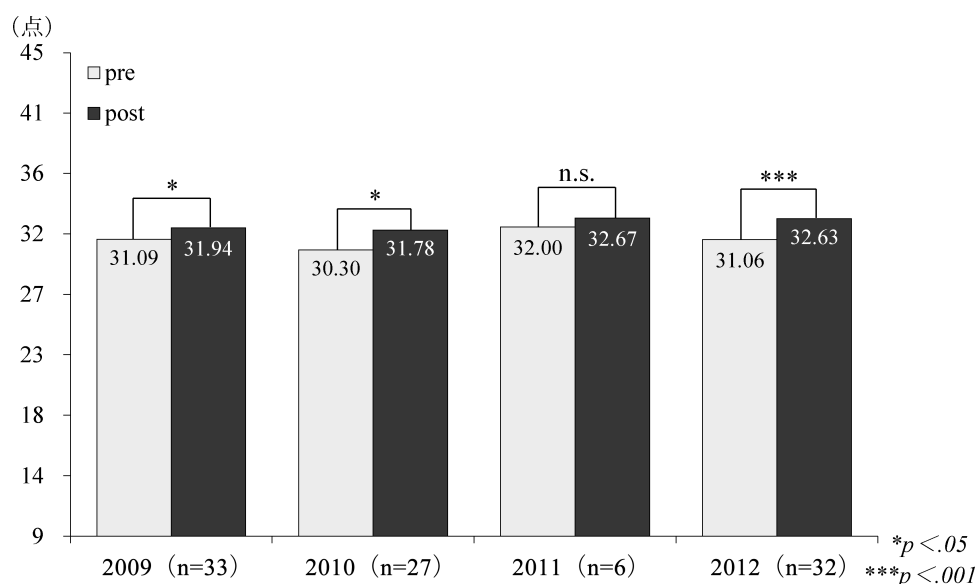


図5 努力主義得点の pre・post 比較

人に迷惑をかけるのが嫌やから全力でやりきった」、「『最後まで笑顔でいること』という個人目標を達成できた理由として、) 楽しいか楽しくないかではなく、自分がどれだけ楽しむかということを心に活動してきて良かった」などの個々の目標を達成する為の努力を惜しまなかったことも影響していると考えられる。

### 5. 3. 3 自信と自己受容得点の pre・post 比較

図6は自信と自己受容得点の pre・post 比較を示したものである。自信と自己受容は、課題解決に対する自信や自己認識に関連しており、達成動機や努力主義を基盤的に支える概念である。この自信と自己受容の得点幅は、12点から36点である。

結果、pre・post 間に統計的に有意な差は認められなかった ( $t(31)=1.46, n.s.$ )。また、2012年度の結果においてはポイントが低下するという結果であった。過去3年間と比較しても pre・post 共に低く、比較的、自信を持ち合わせておらず自己認識も低い傾向にあることが理解できる。自由記述から考察すると、実習全体に対して、最後まで離脱することなくやり遂げることができた達成感を感じているものの、個人目標に対して達成できなかったとした者が4名、達成できた部分とそうでない部分があるとした者が9名であった。つまり、半数近くの者が少なからず目標を達成できておらず、言い換えるならば失敗体験をしていることが分かる。また、「この4日間で『やっぱり自分はこういう人間なんだ』と思うことが多かった」や「(マリンに参加して思ったことは) もっと自分に自信を持てるようになりたい」などの自身のネガティブな側面を再認識している記述が見られたことから、非日常的で不慣れな環境や、集団行動が根底にある生活環境において自己と向き

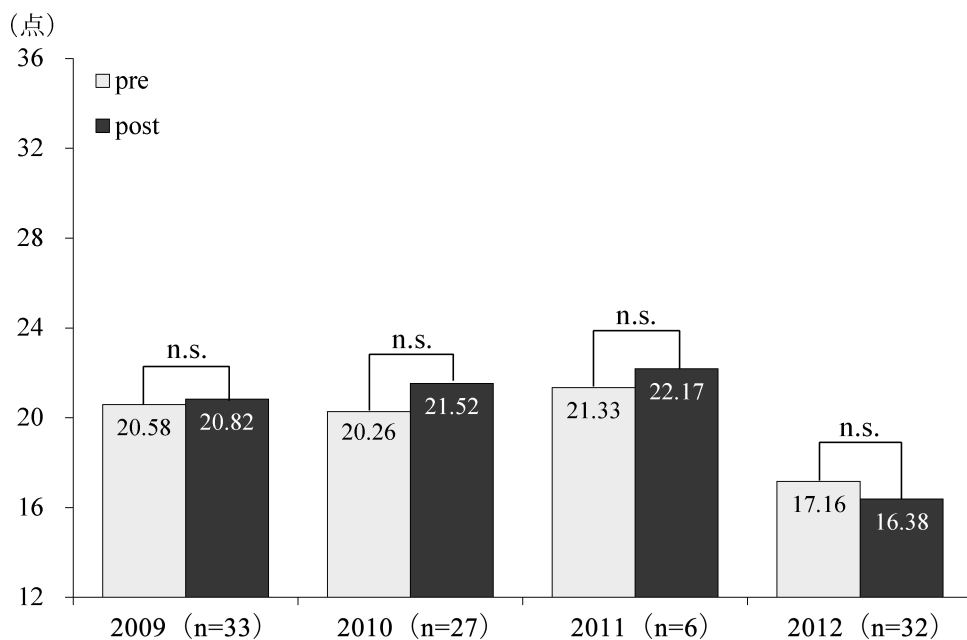


図6 自信と自己受容得点の pre・post 比較

合った結果、現状の自分自身を低く見積もる結果を招いたと考えられる。

### 5. 3. 4 他者のまなざしの意識得点の pre・post 比較

図7は他者のまなざしの意識得点の pre・post 比較を示したものである。他者のまなざしの意識は、他者の自分自身に対する評価や関係性に関する項目で構成されており、自信と自己受容と同様、達成動機や努力主義を基盤的に支える概念である。この他者のまなざしの意識の得点幅は、8点から40点である。

結果、統計的に有意な変化は示さなかった ( $t(31)=-1.22, n.s.$ )。また、過去3年間では低下、もしくは変化無しであったのが、今年度は向上を示す結果であった。先行研究(飯田ら, 1988; 関根ら, 1996)においては、対象・プログラム内容等の違いはあるが、プログラム経験後に他者のまなざしの意識のポイントは大きく変化が見られないと報告されている。

他者のまなざしの意識は、他者からの評価に対する自己認識である。つまり本結果では、マリンを経験したことで他者からの評価を以前よりも気にするようになったと理解することができる。自由記述には「マリンで新しい繋がりができた」、「班のメンバーに恵まれた」などの記述が多く見受けられた。しかしその反面、他者との関係性が今までよりも近くなったことで、「自分のことだけでなく、周りをよく見て行動する大切さを学んだ」や「周りの人に迷惑をかけないように心がけた」などの周囲に対する気遣いや集団の中の自分という認識を持つように心がけている記述が多く見受けられた。本来ならば、周囲との関係性が近くなることで他者の評価や視線を気にしなくなる傾向にあるが、今年度の学生におい

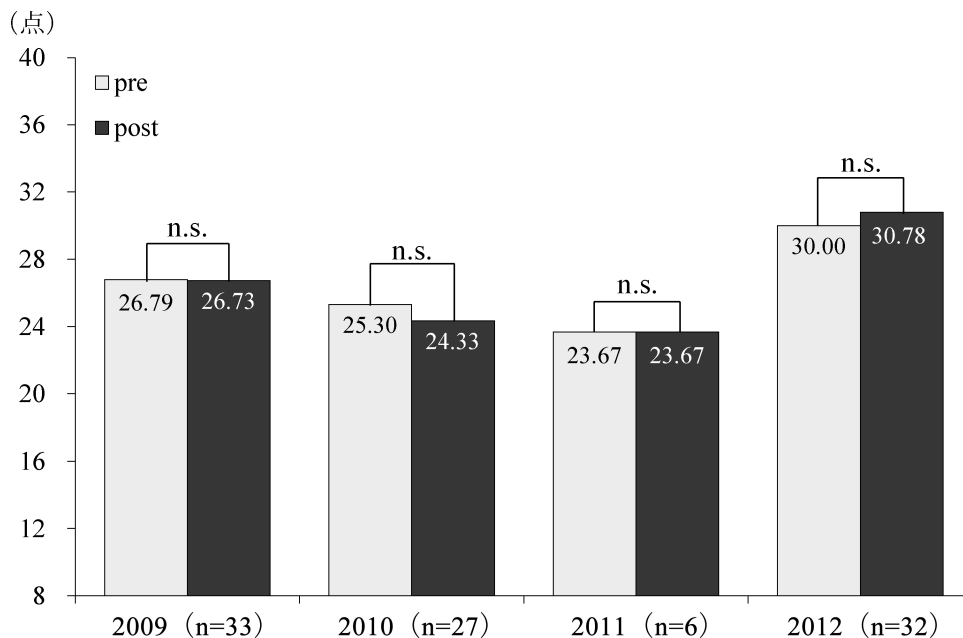


図7 他者のまなざしの意識得点の pre・post 比較

ではマリンを経験することで、集団の中の自分を今まで以上に意識するようになり、それが他者の評価に対する不安となるのではなく、周囲への気遣いと集団行動に対する規範となっていたことが考えられる。つまり、この変化に関しては否定的に捉える必要はないと考えられる。

## 6. 結論

本研究の目的は、学生の自己概念の変化、及び過去3年間のデータとの横断比較によってマリンのプログラム評価を行い、今後のマリンをより良いプログラムとする為の基礎資料を得ることであった。結果として、以下のことが明らかとなった。

- 1) 主となる14プログラムのうち10プログラムにおいて、満足度が期待度を統計的に有意に上回った。
- 2) マリンを経験することで、今年度の学生の自己概念は有意な向上を示した。また下位尺度では、達成動機・努力主義において統計的に有意な向上を示した。

本研究で定義したプログラム評価を行うにあたって重要なことは、先述したとおり「プログラムが対象者に対してもたらす結末 (Weiss, 1998)」である。つまり、マリンが学生にもたらす結末として自己概念の変化に焦点を当てて比較検討を行った結果、例年の結果とは異なり、学生の自己概念が統計的に有意な向上を示したことから、今回展開されたマリンの有意性が示されたのではないだろうか。また、プログラム満足度が期待度を上回ったことで、プログラム内容の充実度もある程度、担保されたと判断できよう。

また、授業の一環として展開されていることから、マリンの教育的意義の側面から考察した場合でも、例年のマリンに比べてもより良い効果を生み出したのではないだろうか。その差異について言及するならば、やはり、例年と異なった1) 1日の延泊、2) 新規プログラムの導入が影響していると考えられる。影山ら (1988)・橘ら (2003) がキャンプ期間やプログラム内容の差異が対象者に与える効果に影響を及ぼすと報告していることから、非日常的な環境で課題を克服する頻度や内容が増えれば、より良い心理的变化も望むことができるだろう。しかしながら、本研究ではプログラムの期間が長くなったことで、マイナスの変化が見られた部分もあった。自己概念の下位尺度である自信と自己受容では、期待される効果とは逆の変化を示した。より長く集団生活を共にすることで、自身の至らない点や新たに見える否定的な側面が表れたことが要因であるとの考察をしたが、その点に関しては実習目的でもある「自己や他者に対する気づきを深めること」を考えれば、マリンに参加したことで得られた個々の糧と理解できるのではないだろうか。

今年度のマリンにおいては、ある一定の効果をもたらしたと結論付けることができる。しかし、一概にこの結果がマリン全ての評価であるとは言い難い。冒頭でも述べた通り、今年度よりプログラム期間やプログラム内容が変更された為、例年との比較はあくまでも

1つの目安であると考えている。つまり、次年度以降にも同様以上の効果をもたらされるのか否かを検証し、冷静に判断しなければならない。その為にも今年度の結果を踏まえ、次年度以降も学生にとってより良いプログラムとなるように取り組んでいく必要がある。

#### 引用文献

- 飯田稔・井村仁・影山義光（1988）“冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容”『筑波大学体育科学系紀要』第11巻，pp79-86.
- 井澤悠樹・松永敬子（2009）“マリン&レクリエーション実習のプログラム効果に関する研究－学生のSelf-efficacyに注目して－”『大阪女学院大学紀要』第6号，pp97-106.
- 井澤悠樹・松永敬子（2010）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究－女子大学生の自己概念の変化に焦点を当てて－”『Leisure & Recreation（自由時間研究）』Vol. 37, pp101-110.
- 井澤悠樹・松永敬子（2011）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究－自己概念の変化とプログラム満足度による少人数プログラムの検討－”『大阪女学院大学紀要』第8号，pp215-226.
- 影山義光・飯田稔（1988）“大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容”『筑波大学体育科学系紀要』第11巻，pp139-144.
- 影山義光・布目靖則（2001）“大学キャンプ授業の参加学生の自己概念と孤独感の変化”『野外教育研究』Vol. 5(1), pp49-59.
- 梶田毅一（1988）『自己意識の心理学第2版』，東京都，東京大学出版.
- 公益社団法人日本キャンプ協会調査研究委員会（2006）『キャンプのものさし－野外教育活動を評価するための尺度集－』東京都，公益社団法人日本キャンプ協会.
- 近藤剛（2004）“鳥取県内の組織キャンプに関する評価研究－参加者の自己概念を中心に－”『鳥取短期大学研究紀要』Vol. 50, pp83-91.
- 日本野外教育研究会編（2001）『野外活動－その考え方と実際－』東京都，杏林書院.
- Patton M. Q. (1997) 『Utilization-Focused Evaluation. (3rd ed.)』 Sage publications, inc, pp19-38.
- 関根章文・飯田稔（1996）“キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力感に及ぼす影響”『筑波大学体育科学系紀要』第19巻，pp85-89.
- 橘直隆・平野吉直・関根章文（2003）“長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響”『野外教育研究』Vol. 6(2), pp45-56.
- 上瀬由美子（堀洋道他編著）（2000）『心理尺度ファイル』東京都，垣内出版.
- Weiss, C. H. (1998) 『Evaluation: Methods for studying programs and policies. (2nd ed.)』 Prentice Hall, pp4-9.
- 渡邊仁・飯田稔（2005）“キャンプ経験による女子高校生の自己概念の変容過程”『野外教育研究』Vol. 9(1), pp55-66.
- 安田節之・渡辺直登（2008）『プログラム評価研究の方法』東京都，新曜社.

